

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授 進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



関屋康氏は、神田外語大学の開学以来、外国語学部英米語学科で教え続けてきました。内容中心言語教育や自律学習などの新たな教育コンセプトを取り入れ、先進的な英語教育カリキュラムを構築するとともに、中学校・高校の英語教員が求める現場に根差した教授法を学べるプログラムを大学院修士課程に設けた神田外語大学。約40年にわたり、その挑戦の歴史を共に歩んできた関屋氏だからこそ語れる史実をお伺いしました。（構成・文：山口剛）



昭和29（1954）年に山口県宇部市で生まれましたが、8歳の時に引っ越し、福岡県の福岡市と筑紫郡（現在の筑紫野市）で育ちました。中学生の時に英語の塾に通っていたのですが、米軍の板付基地（※）で通訳をしていた方が先生で、発音も全然違うし、すごく熱心に教えてくれたので、塾に行くのが楽しくてたまらなかった記憶があります。

父と祖父は歯科医院を開業していたので、私に継いでほしかったようですが、自分は歯科医には向いていないことは分かっていたので、理解してもらって好きだった英語を学ぶために上智大学外国語学部英語学科へ入学しました。

入学後はESS（英語劇）での活動に没頭しました。上智大学はカトリックの大学で、イエズス会の神父様が住んでいて、毎朝30分ほど英語の発音練習やパタンブラクティスと呼ばれる文型練習をしてくださいました。私も毎日参加していたのですが、とても熱心な先生で心を動かされたことも、後に教員になるきっかけだったのかもしれません。



大学3年も終わろうとしていた時、まだ将来の方向性が決まっていませんでした。すると、ESSを指導してくれていた先生が「アメリカのウィスコンシン大学グリーンベイ校で、上智の学生に奨学金を出すプログラムがある。興味があれば推薦するから行ってみないか」と誘われました。

卒業前に英語圏への留学を一度は経験してみたいと思っていましたので、1年間のつもりで、休学して留学したのですが、そこで言語学の素晴らしい先生に出会い、上智大学で取得した単位を使えばウィスコンシン大学でも言語学の学士号が取れると分かり、結局2年間滞在しました。

アメリカで言語学を専攻したので、その知識を生かせる仕事として英語教員があると思いました。上智大学の4年次に復学し、大学院にも進学しながら教職課程を履修して、教員免許を取得しました。

※板付（いたづけ）基地：米軍から返還され、現在の福岡空港となった。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



思わぬ縁から得た 神田外語大学講師への誘い

上智大学の大学院生の時のことでした。研究科長のフェリス・ロボ先生から「ある塾で講師を探しているのだが、大学院生を希望している。やってみないか」と言われ、引き受けました。その塾を主宰する女性のご主人が、慶應義塾大学で教えていらっしゃった小池生夫先生でした。

小池先生は後にJACET（一般社団法人大学英語教育学会）の会長を務められる英語教育界では有名な方です。塾での授業を終えると小池先生と話していたのですが、先生はいつも私の卒業後の進路を気に掛けてくださっていました。

教職課程で学び、教育実習なども経験すると、もっと英語教育について理論と実践を専門的に深く学びたいという想いが強くなりました。

アメリカには英語を母語としない人々への英語教育の専門課程であるTESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages：英語教授法）があります。幸運にもフルブライト奨学金を受けられたので、TESOL課程があるニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズカレッジの修士課程に留学しました。昭和58（1983）年には修士号を取得しましたが、もっと学びたいと思い博士課程に進学しました。

昭和60（1985）年の夏、ワシントンD.C.にあるジョージタウン大学で英語教育に関する国際学会が開かれ、小池先生と再会しました。その時、小池先生から「関東地方の私立大学では初めての外国語学を専門とする単科大学の開学が計画されている」とお聞きしました。後の神田外語大学です。

小池先生の恩師に日本の英語教育界の第一人者である小川芳男先生がおられ、後に小川先生は神田外語大学の初代学長を務められました。その関係で、小池先生は開学時に着任する英米語学科の専任教員の候補者を探しておられ、私にも声を掛けてくださったのです。当時私は、博士論文を書いていましたが、日本で教員をしながら執筆することに決め、神田外語大学の専任講師をお引き受けしました。思えば、上智大学の大学院時代に、あの塾の講師を引き受けたことが小池先生、そして神田外語大学へのご縁となったのです。不思議なものです。

開学時から英米語学科で教えられた原岡笙子先生（初代学科主任、後に名誉教授）、ロバート・デシルバ先生（現・グローバル・リベラルアーツ学部教授）、久泉鶴雄先生（後の学科主任）は、小池先生のお声掛けで開学時の教員に着任されたと記憶しています。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



1人ひとりの学びを大切にする「3つのi」と先駆的な英語教育のプロ集団 ELI の誕生

昭和62（1987）年4月、神田外語大学が開学しました。当時は、英米語、スペイン語、中国語、韓国語の4学科しかありませんでした。でも、1期生たちは「自分たちがこの大学を創るんだ」という意気込みもあって、さまざまな部活動などを始めました。私もESSの顧問を引き受けました。



開学後2年間のカリキュラムは、原岡先生とフランシス・ジョンソン先生が中心となって立案していました。ジョンソン先生は、コロンビア大学でTESOLを学び、オーストラリアで英語を母語としない人への英語教育を実践し、多くのテキストを執筆されてきた方です。

ジョンソン先生は「3つのi」の大切さを提唱されていました。"individualization"（学生が自らの特性に合った学習方法を発見し、責任を持って学習を遂行していく）、"interdependence"（学生同士助け合い、協働で学ぶ）、"interaction"（高密度のインタラクションを行う）です。授業では、学習者は互いに依存しながら学び、互いに影響を及ぼすことが大切であるとともに、一人ひとりに合った学習法を習得していくという考え方です。その考えは神田外語大学の英語教育の指針となりました。



ジョンソン先生の主導で、神田外語大学では開学3年目の平成元（1989）年に、ELI（English Language Institute）が設立されました。TESOL修士号を持つ外国人を教員として採用し、授業外でも英語を使用する機会を設けたELIは当時としては、とても先駆的な取り組みだったと思います。ELI教員は1、2年次を中心とした英語教育の担当としてカリキュラムの一端を担うようになっていきました。

4人でスタートしたELIは、その後、令和6（2024）年度には60人以上の規模にまで発展しました。発足当初、ELIの主な役割は授業内外で学生の英語学習をサポートすることでしたが、その役割は徐々に拡大していきました。現在では、神田外語大学全体の英語教育の改善を目的としたさまざまな共同研究も実施しており、英語教育のプロフェッショナル集団として認識される組織へと成長していると感じています。

※フランシス・C・ジョンソン神田外語大学名誉教授『ELI のカリキュラムは進化する』

https://www.kandagaigo.ac.jp/memorial/interview/03/interview_03_1.html

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



英米語学科の特徴となった 「内容中心の英語教育」

実は開学当時、1・2年次英語カリキュラムは、教材や教授法などかなり確立していましたが、3・4年次の英語科目については、具体的なカリキュラム内容は決まっていませんでした。

英米語学科には文化人類学者であり、TESOLも学ばれたソニア・イーグル先生がいました。イーグル先生は、南カリフォルニア大学大学院で学ばれた内容重視の語学教育（Content-Based Instruction）を提唱されました。単に英語の技術を訓練するのではなく、英語を通じて知識を学ぶカリキュラムです。

英語力というと、4技能（読む・書く・聞く・話す）の訓練に目が行きがちですが、本当に重要なのは、これらの技能を使って何を理解し、自分の考えや思想をどのように発信するかという点です。現在では、CLIL(Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習)として普及していますが、当時は神田外語大学が先駆けだったと思います。

この言語教育アプローチであれば、ジョンソン先生の「3つのi」を実践することもできますし、英語を通じて教養も学べます。こうして内容重視の英語カリキュラムが、開学3年目の平成元（1989）年からスタートしました。

しかし、内容と言語を統合するというのは、単に教科内容を英語で教えればよいというわけではなく、教育方法にかなり工夫が必要です。英米語学科では、このカリキュラムのスタート以来、試行錯誤を重ねながら、言語学習と教科学習を融合させた形の英語教育を目指してきました。

そして、これが後の3・4年生対象の「英語総合講座III」や現在の「English for Liberal Arts」という内容中心英語科目へと発展していきます。この内容中心の英語教育こそが神田外語大学における英語教育の大きな特徴となっています。

話は開学4年目の平成2（1990）年に戻ります。その年、初代学長の小川先生が逝去されました。後任の学長に就任されたのは井上和子先生でした。

井上先生は着任されてすぐに、英米語学科の語学以外の「専門教育科目」と呼ばれていた科目（現在の「研究科目」に相当）のカリキュラムが体系的に専門知識を学べる構造になっていないことを指摘されました。そのご提言を受けて、早速、英米語学科内で「言語学」「比較文化」「国際関係」などの5つの「副専攻課程」を仮に立ち上げました。

この取り組みは、専攻語学科と4つの研究コース（言語研究、コミュニケーション研究、比較文化研究、地域国際研究）を核とする大学全体のカリキュラム（井上学長時の平成7（1995）年度スタート）や後の研究プログラム制へとつながっていった重要な第一歩だったと思います。

井上先生は、日本を代表する言語学の研究者でありながら、熱心な学生であればどのような学生に対しても献身的に指導を行い、育てていくという教育者としての真摯（しんし）な姿勢をお持ちでした。その姿勢にはいつも感銘を受けていました。本学卒業生の1期生である藤巻一真さん（現・神田外語大学英米語学科准教授）や上田由紀子さん（現・山口大学教授）は、井上先生の指導と薫陶を受けた代表的な存在です。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



教員が英語の授業を見直す きっかけを提供した夏期公開講座

神田外語大学では開学当初から教職課程を設けていました。担当は佐々木輝雄先生です。佐々木先生は、中学・高校の教員を経て、千葉県教育庁、文部省（現在の文部科学省）での職務を経験され、幅広い知見をお持ちでした。アメリカ生まれで、日本の英語教育を訳読式からコミュニケーション主体に変えたいという志のもと、文部省で小川先生と共に学習指導要領の改革に当たってきた方です。神田外語大学の開学から携わり、開学3年目からは教職課程の英語科目の担当をされました。

以来、神田外語大学では毎年、英語教員を輩出し、千葉県内で多くの卒業生が活躍するようになりました。今では、現職の英語教員や指導主事、管理職として他の英語教員のPD（プロフェッショナル・ディベロップメント）に携わる卒業生たちが、教職課程の授業にゲストスピーカーとして登壇してくれています。彼ら・彼女らは、現場で培った実践的な知識を教職課程の学生たちと共有し、大きな刺激を与えています。このような取り組みが可能になっているのは、神田外語大学がこれまで築き上げてきた長い歴史のたまものだと考えています。

神田外語大学の開学と同じ昭和62（1987）年4月、コロンビア大学ティーチャーズカレッジ日本校のMA TESOLプログラムが、東京のJR水道橋駅近くのビルで開校しました。私がニューヨークで学んでいた英語教授法の修士課程が日本国内で学べるようになったのです。

私自身は、専任講師を務めながら、平成3（1991）年にニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズカレッジの博士号を取得し、同年に神田外語大学の助教授となりました。その年から、コロンビア大学ティーチャーズカレッジ日本校で非常勤講師としても教えるようになりました。

平成4（1992）年、神田外語グループでは、「夏期公開講座」をスタートしました。中学校や高校で教える現職の英語科教員向けに、神田外語学院と神田外語大学の教員が英語教授法の専門的ノウハウを紹介する講座です。

現職の先生方は学習指導要領の改訂などにより、英語の新しい教え方を授業に導入しなければなりません、その変化に対応できないのが実情でした。だからこそ、指導法を学びたいという意欲のある先生方も多かった。そんな先生方に授業を見直すきっかけにしてほしいという想いから始まったのが夏期公開講座です。もちろん、神田外語大学が英語教員教育に力を入れていることを知ってほしいという狙いもありました。その後、千葉県の教育委員会からの要請で、県内の英語科教員向けの講座も実施しました。

こういった現場のニーズをリアルに感じる機会があったことも、後に、現職英語科教員のリカレント教育へ体系的に貢献できる場として、神田外語大学がTESOLの大学院を設立することへとつながっていきます。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



教員と職員が生んだ 教育イノベーション「SALC」

平成11（1999）年からELI教員を務めた方に、ルーシー・クッカー先生（現・ノッティンガム大学教授）がいました。クッカー先生は、ヨーロッパの外国語教育ではSALC（Self-Access Learning Center：自律学習センター）という施設が効果を発揮しているという事例を私たちに紹介してくれました。SALCは、語学を学びたい学生が自ら訪れ、常駐するラーニング・アドバイザーが学び方を助言し、自律的な学びを促していくというものです。

この画期的な考え方は神田外語大学が目指す英語教育にも通じるということから、まず、4号館の2階にあったふたつの教室をひとつの大きな空間に改築し、最初のSALCを立ち上げました。ラーニング・アドバイザーが常駐し、ELI教員によるさまざまな英語学習支援が受けられるSALCは学生たちにも非常に好評で、利用率もぐんぐん伸びていきました。初代のラーニング・アドバイザーは、現在、立命館アジア太平洋大学で教授を務めているカッティング美紀先生です。

平成15（2003）年には6号館が完成し、SALCとELIを含む教育施設SACLA（Self-Access, Communication, and Learner Autonomy）が誕生しました。神田外語大学では、SALCのさらなる推進を図るために、クッカー先生が書いた論考を基に、当時、学事部長を務めていた伊藤晋二さんが書類を作成して文部科学省に申請し、「平成15年度 特色ある大学教育支援プログラム」に「英語の自立学習支援の新システム」が採択されました。

当時、英米語学科の学科主任（現在の学科長）を務めていた私は、SALCの取り組みを全面的に支援するとともに、神田外語大学の特徴として学外にも発信していきました。

SALCは、6号館のSACLAから現在の8号館（KUIS8）へと発展し、神田外語大学の大きな特徴となっていきますが、その発端はひとりの教員の発案であり、わずかふたつの教室だったのです。そのアイデアを職員が一丸となって実現した。伊藤さんは自身もTESOLの修士号をお持ちで、教育的な視点をしっかりお持ちの実務家でした。教育のイノベーションは、教員と職員のコラボレーションからしか生まれないと実感しました。

その後、8号館には「学習者オートノミー教育研究所：Research Institute for Learner Autonomy Education（RILAE）」が設立され、今や神田外語大学は学習者オートノミー教育研究の中心となっています。ここではオンラインで学習アドバイザーの養成も行い、世界中から注目を集めています。また、後述する大学院TESOLプログラムでは「Learner Autonomy（学習者オートノミー）」や「Advising in Language Learning（言語学習アドバイザーング）」といった科目を設置しており、これも神田外語大学ならではの特徴となりました。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



現場のニーズに根差した 英語教授法の大学院が誕生

すでに触れた通り、昭和62（1987）年に開校したコロンビア大学ティーチャーズカレッジ日本校では、修士課程でTESOLを学べました。私は非常勤講師を務めていましたが、残念ながら平成23（2011）年には閉校することが決まってしまいました。

神田外語グループでは夏期公開講座を通じて、現職の英語教員に教授法のノウハウを提供してきました。でも、単にノウハウやスキルを覚えるだけでなく、もっと理論に根差した英語教授法の実践を先生方に学んでほしいという想いが私には常にありました。

そこで、神田外語グループの佐野元泰理事長に「コロンビア大学のTESOL大学院が閉校します。プログラムを教員を含めて引き継いでみませんか」と相談してみたのです。私は非常勤講師をしていた関係でさまざまなリソースを引き継げる可能性を見いだしていました。佐野理事長は、「面白いですね。うちでやってみましょう」と快諾してくださいました。その英断は本当に素晴らしかったと思います。

しかし、新たな大学院のプログラムを立ち上げるのは容易なことではありません。まったく新しい大学院を設立するのではなく、神田外語大学に以前からある大学院言語科学研究科の「英語教育プログラム」をリニューアルする形でTESOL大学院を導入することが決まりました。

英米語学科の小林真記先生、伊藤泰子先生、朴シウォン先生（現・順天堂大学国際教養学部教授）が全面的に協力してくれて、事務局からも学事部長の長田厚樹さんや学長室長の二瓶清実さんをはじめ職員の方々が積極的に、自分ごととしてさまざまな案を出してくれました。

通常の業務に加えての作業だったので本当に大変でした。大詰めの作業で朴先生が私の暮らす横浜まで来て、ホテルに滞在しながら一緒に書類の校正をした思い出もあります。きっと、「よい英語教員を育てたい」という情熱を共有できていたからこそ、大変な仕事をやりきれたのだと思います。そして、仕事をしていくうえで、最も大切なのは人間関係であると改めて思いました。

平成25（2013）年9月、神田外語大学大学院言語科学研究科MA TESOLプログラムが開設され、私はプログラム・ディレクターに就任しました。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



地域や国籍を超えた 多様な英語教員たちが学ぶ場が実現

大学院MA TESOLプログラムの学生たちは、ほとんどが現職の英語教員です。開講は週末ですから、普段は学校で教えている先生方も学ぶことができます。そのため、キャンパスは利便性の良い神田外語学院（東京都千代田区）の7号館に設けました。大学院生のなかには、仙台など遠方から通う先生もいました。コロナ禍以降は対面授業とオンライン授業を学期ごとに実施しているので、沖縄から履修する大学院生もいます。

カリキュラムはコロンビア大学のプログラムを受け継ぎましたが、より文部科学省の教育指導要領に沿った内容にして、小学校も含めた学校で実際に教える英語教員のニーズに合った内容に改訂しました。

大学院生たちはTESOLの教授法を学びつつ、実習や授業観察を行い、最終的にはリサーチ・プロジェクトに取り組みます。このプロジェクトでは、自分が行っている授業についての問題意識を取り上げて文献で研究をし、最終的にはその研究に基づいて何が実践できるかという提案まで導きます。ですから、教育現場のニーズに根差した学びがこのプログラムでは行われていると思います。

今、文部科学省は「できるだけ英語を使って授業しなさい」としています。でも、先生方に英語で学ぶ経験がなければ、英語を使った授業はできません。ですから、このプログラムの授業は全て英語で行います。日本人だけでなく、ALT教員の外国人の方も多く履修しているので、より自然に英語で授業ができています。現職教員のティーチャーディベロップメントをサポートするという意味で成果を上げていると思いますね。

私の恩師であるコロンビア大学名誉教授のジョン・ファンズロー先生の言葉に、“Small changes in teaching lead to big changes in learning.（教え方を少し変えるだけで、学び方に大きな変化が起こる）”というものがあります。この言葉にある通り、このプログラムでの学びが先生方の実践に結び付き、生徒たちの自律的な学びへとつながっていく一助になればうれしいですね。

大学院MA TESOLプログラムでの教育は、外国語学部の教職課程の充実にもつながりました。学部でも「外国語評価法」を新設し、「第二言語習得研究」と「外国語評価法」が必修科目となりました。また、高い英語力を持つ教員を育てるため、「英語科教育法」履修時の英語力基準に加え、教育実習に参加するための英語力基準という2段階の基準を設け、英語力の質を保証する仕組みを整えてきました。これらの課程は他大学と比較しても非常に充実したカリキュラムを提供できていると自負しています。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



多様な英語に対応する教材開発を 東京外国語大学との共同研究で実現

平成24（2012）年からスタートした「社会言語学的変異研究に基づいた英語会話モジュール開発」は、21世紀COE（Center of Excellence）プロジェクトで27カ国語の言語モジュールを開発した東京外国語大学研究チームとの共同プロジェクトです。最初の4年間は私が研究代表者を務めました。その後は矢頭典枝先生（英米語学科教授、現・関西学院大学教授）が研究代表を務めました。

日本の英語教育のなかで、実際に使用される多様な英語の変異（言語の多様性）を学びに取り入れたいという想いから始まったプロジェクトです。この研究は、英語を単一の「正しい」形としてではなく、社会や地域、文化によって異なる多様な姿を持つ言語として捉え、それを教育現場でどのように生かせるかを模索することを目的としていました。なお、平成30（2018）年にスタートした「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」は、この平成24（2012）年にスタートしたプロジェクトの延長線上にあります。

具体的には、社会言語学の視点から、英語の発音、語彙、文法のバリエーションを教材に反映させることで、学生たちが異なる英語のバリエーションへの理解を深め、グローバルなコミュニケーションの場で柔軟に対応できる力を養うことが成果として期待できます。

世界における英語の実際の使用状況では、いわゆるネイティブスピーカー以外の英語話者と対話する機会が圧倒的に増えています。そのため、国際語としての英語（English as an International Language：EIL）や共通語としての英語（English as a Lingua Franca：ELF）の役割が、ますます重要になっていると考えられます。このプロジェクトで開発された12地域の英語モジュール教材は、こうした現状を踏まえ、日本人英語学習者に対する英語話者の概念におけるパラダイムシフトを促すうえで非常に意義深いものだと感じています。

この研究では、発音や会話のモジュールを開発するために、それぞれの英語を母語とする人たちの音声を収録し、教材を開発していきました。収録は両大学で行われたのですが、神田外語大学ではELIの教員の協力を得て、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなど、さまざまな英語の収録をしました。MEC（メディア教育センター、現・教育イノベーション研究センターの前身）の職員たちも全面的に協力してくれました。ふたつの外国語大学とその研究者、教員、職員がコラボレーションして、研究を発展させた意義は大きいと思います。

この教材は大学や大学院での英語音声学や社会言語学の授業に加え、中高生がオーストラリアなどへ修学旅行に行く際の事前学習として、またシンガポールに赴任する日本企業の社員向けの英語研修や通訳の方々のリソースとしても役立っています。さらに、この教材は、無料でオンラインで提供されているため、多くの日本人英語学習者に利用していただきたいと思っています。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



コロナ禍での苦境から生まれた オンライン授業という教育の新たな機会

令和2（2020）年はコロナ禍により、神田外語大学では全ての授業をオンラインに切り替えました。もともと私はアナログ人間で、デジタル機器の操作が得意ではなかったため、短期間でオンライン授業のノウハウを身に付けるのに必死でした。幸い、大学や同僚からの手厚いサポートがあり、Google ClassroomやZoomの使い方を習得し、何とか1年間、全ての授業をオンラインで実施することができました。

中でも特に大変だったのは、1年生の英語の授業です。新入生たちとは初対面が画面越しだったため、例年とは異なり、信頼関係を築くのに非常に苦労しました。

オンライン授業では、学生の表情や身体の動きといった反応を読み取るのが難しく、学生同士も顔を合わせる機会がないため、クラスメートとしての一体感や絆が生まれにくかったと感じました。インタラクティブで協働的な活動を目指しましたが、語学の授業においては、どうしても学習効果が半減してしまったように思います。

ただ、この時に習得したGoogle Classroomの活用法は、対面授業が再開された後も非常に役立っており、今も全ての授業で活用しています。また、対面授業でもZoomを使って海外からゲストを招いたり、卒業生によるパネルディスカッションを行ったりするなど、授業の形態がより多彩になりました。

大学院のTESOLプログラムでも、同様にオンライン授業へと移行せざるを得ませんでした。ほとんどのクラスが10人以下で、しかも受講生の多くが現職の教員だったこともあり、Zoomでも非常にインタラクティブで質の高い授業が可能であることが分かりました。

この経験を基に、TESOLプログラムでは令和3（2021）年の秋学期からオンラインまたは対面の選択受講方式を導入し、全ての科目をオンラインでも受講できるようにしました。この制度によって、沖縄、宮崎、大阪、宮城など遠方からの入学者も増え、プログラムの拡大につながったことは大きな成果でした。

コロナ禍は大変な出来事ではありましたが、その経験があったからこそ得られた新しい可能性や成長があったと実感しています。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授 進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



個を大切にすることから生まれた 「自律学習と協働学習の奨励」という特徴

神田外語大学では開学以来、先生方の知恵を寄せ合い、授業で実践し、幾度もカリキュラムの改訂を重ねながら、教育内容を進化させてきました。その特徴のひとつが自律学習と協働学習の奨励です。

目指すのは、学生が自らの英語学習を自分で管理する力を養うこと。そのプロセスでは、学習仲間との協働活動や教員、学習アドバイザーのサポートが重要な役割を果たします。本学ではこのための環境が整備されており、教員も学生を支える体制が充実しています。

授業では、少人数のクラスでグループワークを通じて学びを深めていくことを開学当初から実践してきました。原点には「個々を大切にする教育」があるのだと思います。

私の好きな言葉に“From Sage on the Stage to Guide on the Side（壇上の賢者ではなく、寄り添うガイドであれ）”があります。

少人数の授業では、一人ひとりの学生との信頼関係を大切にしてきました。できるだけ学生のことを理解して、学生同士の協働活動を多く取り入れて授業を進めていく。私自身は「ガイド」に徹して、学生一人ひとりの学習を効果的に「足場掛け（Scaffolding）」することを心掛けてきました。

そして、授業の終わりにリフレクション（振り返り）をして、学生たちが「何が分かっていて、何が分かっていないか」を教員が理解をする。そういった積み重ねが良い授業へとつながっていくのだと思います。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



グローバルに活躍できる卒業生を育成するには、 教養に裏打ちされた高度な英語力の強化が不可欠

神田外語大学の英語教育に関しては、「進化」というよりも「深化」していくことが重要だと考えています。これまで本学が推進してきた取り組みをさらに強化し、確実な成果につなげていくことが求められます。

まず、平成24（2012）年度から平成28（2016）年度にかけて、神田外語大学は文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択されました。その際に、英米語学科が重視したのが、アカデミック英語力の強化です。

アカデミック英語において求められるのは、「認知学習言語能力（Cognitive Academic Language Proficiency: CALP）」と呼ばれる力であり、アカデミックな内容のテキストの読解、講義の聴取とノートテイキング、内容の分析と要約、論理的な意見の発表やレポートの執筆など、教科学習に必要とされる高度な言語運用能力を指します。グローバルな舞台で活躍できる卒業生を育成するためには、教養に裏打ちされた高度な英語力、すなわちCALPの強化が不可欠です。

英米語学科では、このアカデミック英語力の養成を目的に、1年次に週2コマのEnglish for Academic Purposes（EAP）を必修化したほか、英語を教授言語とする講義科目（English-Medium Instruction: EMI）の増設や、「英語専門講読」科目の設置など、さまざまな教育改革を行ってきました。

今後は、これらの取り組みの成果を改めて検証し、教育方法や学習内容を精査したうえで、1年次から4年次までの英語カリキュラム全体におけるCALPの成長を、より体系的に評価・強化していくことが求められます。

学生のCALPが向上すれば、より多くの学生が交換留学制度を活用し、英語圏への留学を実現できるようになると考えています。また、学内においても、より質の高いEMI科目を提供することが可能となり、教育の質のさらなる向上が期待されます。

さらに、本学で学ぶ英語圏からの留学生とEMIの授業を共に受講することや、インターネットを活用して海外大学の授業と連携・交流を行うことなどにより、国際的な学びの場をさらに広げていく可能性もあります。

こうした試みを効果的に実現していくためには、教員間および科目間の連携が非常に重要だと考えています。EMI科目はその分野の専門家が担当しますが、学生は外国語である英語を通じて学ぶため、教授法には創意工夫が求められます。そこで、内容中心の英語授業（ELA: English for Liberal Arts）で用いられている手法などを効果的に活用することが必要です。

また、ELAの授業内容とEMIの内容を連携させることで、EMIにおける教科内容の学びがより深まることが期待されます。

現在、英米語学科ではELAと、英語研究・英語教育研究・英語圏地域文化研究の3つの研究プログラムとの連携を進めており、カリキュラム全体を通して、より深い教養と英語力の育成に取り組んでいるところです。

余談になりますが、EAPが始まった時期に入学した学生に真家峻さんがいます。1年次のころはあまり目立たない学生でしたが、2年次から本腰を入れて勉強し始め、交換留学でアメリカ東海岸のアイビーリーグ名門校、ダートマス大学で学び、大きく成長しました。



彼は神田外語大学を卒業すると、メリーランド大学で修士課程を修了し、ミシガン州立大学の第二言語学研究で博士号を取得しました。そして、帰国後は東京大学で教えた後、東北大学の大学院国際文化研究科の専任講師に就任しました。真家さんのほかにも、活躍している卒業生がたくさんいて、本当にうれしいですね。

ダートマス大学とのつながりは、同大学で教授を務められているジェームス・ドーシー先生です。私の親友でもあるドーシー先生は毎年、ダートマス大学から学生を連れてきてくれて、神田外語大学の学生と文化に関するディスカッションをして盛んに交流していました。そうしたカリキュラム以外で学生の英語を使ったコミュニケーションを活性化していきたいというのはありますね。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第27回 関屋康神田外語大学外国語学部英米語学科特任教授
進化し、深化し続ける神田外語大学の英語教育



言葉の学びを通じて 「他者への想像力」を養ってほしい

外国語を学ぶ大きな意義は「他者への想像力」を養うことにありと私は信じています。言葉を学び、自分の意見を述べる。それはコミュニケーションであり、言葉を伝える相手と自分の文化に触れる機会となります。その出会いが学びの意欲となり、自律学習へとつながっていく。

神田外語大学には「他者への想像力」を養う素晴らしい環境があります。その学びは、「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という建学の理念に通じると思います。卒業生たち、とりわけ教員として教える皆さんには、ぜひ生徒たちの他者への想像力を養ってほしいと思います。

私が8歳の時に山口県宇部市から福岡市に移住したのは、重度の脳性まひを患っていた姉が、障がいのある子たちが学ぶ施設に通うためでした。この学園では、周りが愛情を持って適切な支援をしていれば伸びるという信念のもと、障がいのある子たちの教育に取り組んでいました。その教育を間近に見ていた体験が、一人ひとりの個性を大切にすることを目指す原点だったのかもしれません。

英語を学び始めて以来、導かれるように人との出会いがあり、神田外語大学とのご縁が生まれました。そして、大学ではさまざまな英語教育の進化に携わり、最終的には英語教授法の大学院のプログラムまで立ち上げられた。本当に充実した職業人生を送ることができました。教員の職を離れた後は、たくさんの言語を学んでいきたいですね。

※関屋氏の授業への考えは『英語教師のための自律学習者育成ガイドブック』（神田外語大学出版局）に詳しい。

関屋康（せきややすし）

昭和29（1954）年、山口県宇部市生まれ、福岡県福岡市および筑紫郡で育つ。昭和57（1982）年に上智大学大学院外国語研究科言語学専攻博士課程前期課程修了（修士）。昭和58（1983）年コロンビア大学ティーチャーズカレッジTESOL修士課程修了。平成3（1991）年に同博士課程修了。教育学博士号を取得。昭和62（1987）年4月、神田外語大学開学時に外国語学部英米語学科専任講師に着任。平成3（1991）年に同助教授、平成10（1998）年に同教授に就任。同年から平成15（2003）年3月、平成17（2005）年4月から平成25（2013）年3月まで英米語学科主任（現在の学科長）を務めた。同年9月に開講した大学院言語科学研究科修士課程TESOLの実現に貢献し、プログラム・ディレクターに就任。令和6（2024）年3月に役職を退任し、同年4月、特任教授に就任した。

